
Why Don't You Fight?

吉本 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Why Don't You Fight?

【Nコード】

N1150W

【作者名】

吉本 光

【あらすじ】

突然の病魔に次々と倒れる人々。嵐の後の嵐。動物たちが、生き残った人間に襲い掛かる。死への恐怖。その元凶が倒れても崩れ行く世界。一体何がどうなっているのか。鍵となる言葉は一つ。

「光のみの世界も、闇のみの世界も存在しない」—————

序章

あの日から、俺はけだものになった。人間を支配し、痛めつける。そんな俺に今日、一通のメールが届いた。

差出人 西野 吹雪

件名 宣戦布告

貴方は、元はそんな人間でなかったと聞きました。

今の貴方は悪の帝王というところでしょう。人々を支配し、痛めつけ、酷く殺す。

貴方の昔の友人は貴方を止められない。それならば、私が貴方を倒しましょう。

私はいつの日か、貴方よりも強くなり、貴方の前に現れるでしょう。その時が貴方の死する日です。

私は貴方を許さない。

西野吹雪。この青年には1度会ったことがある。あの時は死に怯え、それからただ逃げ続けていた。あの少年が成長し、青年となり、これほど立派になったことに安堵する。俺を殺すという文面なのに、安心を覚えた。

今の俺は、誰がどう見ても、闇の帝王だ。昔の友人さえ、痛めつける。そんな俺に心がないわけじゃない。俺がまだ成人していなかった頃、心ない帝王がいた。そいつは言った。俺達に向かって。

「光があればまた闇もある。光だけの世界も、闇だけの世界も存在しない。お前達が我より世を奪い返しても、また闇の帝王は現れるだろう」と。

俺は孤独だった。俺は、俺は一体何なんだ？俺は何をしたいんだ？全てがわからない。友もない。いるのは下僕としてしか見る事ができない人間だけ。

さようなら。世界よ。

さようなら。友よ。

さようなら。俺。

第1話 全ての元凶

全ての元凶。それが何かと訊ねられると、きつとあの日だと答えるだろう。

「シンー！」

そう呼ばれて一条信司は顔を上げた。模試が終わり、信司は既に帰宅の準備を始めていた。

「ジュン、どうだった？テストは？」

「俺もそれ聞きに来たところ」

と言って大井淳吾は笑った。淳後とは中学生のときに知り合い、意気投合した。高校に行った今も、二人は同じ学校に通い、つるんでいる。

「俺は色々な意味で終わってるよ」

と言って苦笑する。それを見て近くの女子が騒ぎ出す。淳吾は大人のような顔をしているとは思う。でもそれは女子に言わせるとクールな二枚目だそうだ。残念ながら信司には女子に騒がれる要素もなく、普通、だそうだ。

「俺は・・・完全無欠？」

といってニヤツとすると淳吾はハハッと笑った。

すると

「ちよつと、ここのクラスに内田ゆう奴おる？」

と廊下の窓から眼鏡をかけた女子生徒が言った。それを見て淳吾はブルブルッと震えた。

「どうした？」

にしみやまりん

「あいつ、西宮海女にしみやまりんって言うんだよ。大阪から来たらしいけど」

「何でそんなこと知ってるんだよ」

「そりゃあ・・・」

と淳吾が言いかけたところでドスツと鈍い音がした。続けてゲホゲホと咳き込む声がある。前を見ると海女が内間を見下ろしていた。

「きゃあっ」

と誰かが叫ぶ。

「あんた、いい加減にしいや。ウチの後輩、あんたに付きまとわれて気持ち悪いゆうとんねん！しかも告ってフラれたのに！？あんた、ストーカーやろ？次あの子に手エ出したら、通報したるからな！」水を打ったように静まりかえった教室から、海女は出て行った。海女が遠くに言ったのを確かめて、淳吾は言った。

「俺、王様ゲームの罰ゲームで、あいつに喧嘩売ったんだよ。4月に。もうボロボロにされたんだけど、痣もなんにもなし。手加減したっばいんだけどまあ痛くて痛くて」

淳吾がハア、とため息をつくとき、突然男が教室に駆け込んできて言った。

「これから帰宅の予定だったのですが、えー新型ウイルスが日本で発症し、危険なのでしばらくここにいてもらうことになりました」
「そういう終えたと同時に、「えー」「マジかよ」「ういるすってパソコンとか？」と生徒が口々に言う声が聞えた。

「敷地内であればどこでも構いませんが、後に配布されるマスクを着用することを義務とします」

そういうと男は部屋から去っていった。それと同時に信司は突き動かされるように言った。

「ここに居ちゃいけない」

「は？何言ってるんだよシン？」

「ここは危険だ。どこかに行かないと」

「そりゃ何かしら危険だよ。世界は。安全なところなんてないって」

「そういう事じゃない。・・・わからないのか？」

「何が？」

何が危険なのか？そう自分に訊ねても、信司は答えを見つけることができなかった。

「いいか？とにかく危険なんだ。何かが起こる。今すぐここを出ないと、手遅れになる」

「何だよ？手遅れって？・おい！」

信司はそれに答えずに淳吾の手首を掴んで廊下に出た。淳吾がおい、おい、と言っているのが聞えるが構わなかった。とにかく危険。そう感じてただここを出ようとしていた。

勢いよく角を曲がろうとした瞬間、誰かと正面衝突した。

「いってー！・・・シン、何してんだよ？」

「いったー！アンタ、どこ見て歩いてんねん！ってまあ、わざとちやうやろけどな・・ってアンタ、こないだウチに喧嘩売ってきた奴やんか」

ヒイツと言って淳吾が信司の後ろに隠れる。

「そんなビビらんといえな。ちゃんと加減したやろ？ところで、シン、やんな。アンタ、どこ行くつもりやったん？まさか、脱走？」
ギクリとして思わずとびはねる。それを見て海女はハハッと笑った。
「図星やな。ええやん、ええやん。楽しそう。なあ、ウチも連れてってくれへん？」

予想外の言葉に、信司と淳吾は顔を見合わせた。その様子を見て海女がまた笑った。

「ほら、行こうな。あ、正門と東門はアカンわ。堀をどっかで越えへんと。見張りが立ってんねん。建物の裏行ったら死角に入るから出れるで。行こ！」

海女に引っ張られながら裏へ走った。もしこの時脱走しなければ、俺はきつとこんなことにならなかっただろう。

第2話 従兄

海女に引っ張られて裏へ行き、なんとか塀を乗り越えた。

「嘘・・・だろ・・・」

淳吾が絶望したような声で呟いた。

「嘘じゃない。ウイルスの感染力が・・・凄かったただけだ」

辺りに生きた人の姿は無かった。近くの病院には、治療してもらおうとして力尽きた多くの人々が亡骸になっていた。

「ウイルスで・・・こんな滅茶苦茶潜伏期間短いことあるんかいな・・・」

「出来るだけ離れて歩こう。感染したら元も子もない」

そうは言ってもよ・・・と淳吾が小さく言った。

「こんなにも・・・溢れてたら近づこうと思わなくても行かなきゃならなくなるぞ？ マスク貰ったほうが良かったんじゃないか？」

信司は無駄だ、と言って一つの死体を顎で指し示した。その死体はしっかりとマスクをしていた。さらに、消毒用アルコールを手にかけていた。

「アルコールが効いてないのか!？」

「これほど強力なウイルスは無い。誰かに人工的に作られたものだろう」

それよりも、と海女が言った。

「これから何処行くんか決めた方がええんちゃう？ ずうっと外おったら絶対感染するわ」

それなら、と信司は言い、携帯電話を取り出した。そしてどこかに電話をし始める。

「どこに電話してるんだよ、シン？」

「しーっ！ 電話してんねんから静かにせな」

「もしもし？信司だけど・・・」

ちよつと頼みがあつてさ、と信司は話を続ける。

「すげえな。電話の相手、生きてるんだ」

ほんまやな、と海女が驚いた表情を言う。すると信司が有難う、じゃあ行くから、と言つて電話を切った。

「シン、誰なん？こんな状況で生きてるなんて」

「ん？ああ、従兄だよ、従兄。結構頭いいし落ち着いてる。まあ何よりこの近くに今いるからさ」

そう言つて信司は歩き出した。

「お、おい！待てって・・・」

海女と淳吾も遅れないようについていった。

何キロか歩くと、大きな大学に着いた。

「ぜんぜん・・・近くないじゃないか・・・」

淳吾が疲れたようにとぎれとぎれに言う。

「坂道が多いから。慣れれば平気だよ」

「慣れればってなあ・・・あつ、ここ日本大やん。超難関の。何でアンタここに？」

信司はさあ？と言うと大学の中に入つていった。大学の中も、生きた人はいなかった。

「こんな所にお前の従兄がいるのか？」

と淳吾が聞くと、信司はああ、と短く答えるとずんずん奥へ進んでいった。

倉庫のような建物の前で立ち止まると、

「ヤマト、信司だけど。来たよ」

と言つた。するとカチツと音がして扉が開いた。そこには背の高い青年が立っていて、早く入れ、と促した。海女がめっちゃイケメンやん、と呟いたのが聞えたが、淳吾は苦笑しそうになるのを堪えて中に入った。

中は研究室のようになっていて、入るとすぐに手に何か液体を吹きつけ、靴の裏に付着したものを全て取り除いた。

「悪いな、ウイルスは強力なんだ」

先ほどヤマトと呼ばれた青年が苦笑しながら言った。

「それは俺達も十分実感したよ」

と信司が悲しげに言った。ヤマトはそうだな、と小さく呟き、淳吾と海女に目を向けて言った。

「シン、お前の友達か？」

「あ、はい、ウチ、西宮海女って言います。友達はよく・・・」

と言ったときに淳吾が小さく「友達いんのかよ」と呟いたのを逃さず聞き、淳吾を軽く殴った。

「マリって呼びます。宜しくお願いします」

と言うとそんな風に笑えるんだ、と思うほどかわいらしい笑みを浮かべた。ヤマトは苦笑しながら淳吾を気遣うように見た。

「あ、大丈夫です・・・前ボコボコにされたんで」

と淳吾が言うのと海女はギロリと淳吾を睨みつけた。それに気付いた淳吾は小さくスマセン、と言った。

「あー、俺は大井淳吾です。ダチからはジュンって呼ばれてます。・
・宜しく」

と多少横の海女を警戒しながら言った。ヤマトはそれを見てまた苦笑し、そんな怯えなくても、と言った。

「俺も名乗らなきゃな。俺は一条大和。大和朝廷のヤマト。宜しく」
と言って微笑んだ。

「ところで、まあ聞きたいことは山ほどあるが、お前達の様子からするとここまで歩いてきたな？それに時間も時間だ。奥に仮眠室がある。腹が減ったら仮眠室の梯子を上ったらそこに食料と水を置いてあるから、それを食べるといい。俺はちよっと調べることが残ってるからここを離れるけど」

「うええっ!？ヤマトさん、ここ出ちゃうんすか!？」

さんはつけなくていいよ。それに敬語も使わないでいい。と言って大和は笑った。

「大丈夫だよ。ちゃんと防護服みたいなのがあるから。じゃあ」と言う和大和は裏口があるらしい方向に向かい、消えていった。

「どうするよ、シン？」

三人はカプセルホテルのようになっている仮眠室で顔を出して話をしていた。

「今日は寝よう。起きてたって何も出来ないだろう？」

せやけど、と海女が小さく言った。

「せやけど、これからどないなんねやろ？家族は、どうなってんねやろ・・・」

「携帯電話は繋がりにくくなってる。今回ヤマトに繋がったのは奇跡みたいなものだ。明日考えよう。今日はもう・・・疲れた」

せやな、と海女はいい、おやすみ、と言って顔を引っ込めた。

「おやすみ」

「おやすみ」

もしもヤマトに繋がらなければ、俺はこうならなかっただろう。でも、もし繋がらなかったら、淳吾も海女も、命はなかった。

第1話 2つのニュース（前書き）

東京医科大学病院は実際に存在しますが、全く関係ありません。

第1話 2つのニュース

信司は目が昇ってすぐに目を覚ました。不安で、どうしても眠ることができなかったのだ。淳吾と海女の前では冷静でいてみせたが、本当は一番心細く、叫びだしたかった。最後にここに来た時に大和からもらったノートパソコンは今も健在で、環境も整っていたから、インターネットに繋ぐことができた。カバンをぐそぐそと探り、iPodからイヤホンを抜き、パソコンに接続する。そしてニコニコ動画にアクセスし、最後にアップされたニュースを見る。

「……どうということでしょうか!? 次々と、人々が倒れていきます。なんらかの病魔が我々に牙を……いたのでしょうか？」

「こちらら東京医科大学病院前です。ごらんのように、大勢の方々が、医師の診察を受けようと押し寄せています。」

「どれも分かりきった事だらけだった。死亡した人数も分からない。インターネットは大して役に立たないようだ。」

しばらくすると、淳吾と海女が起きてきたので、簡単に情報を伝えた。2人は何も言わず真剣に話を聞いた。

「そんなことなってるなんて……。どないしたらええんやろう……。？」

と海女は小さく呟いた。これからについてああでもないこうでもないといと話し合っていると、大和が強張った表情をして戻ってきた。

「ヤマト」

大和は疲れた表情をしてため息をつく、ぽつりぽつりと話し出した。

「……いいニュースと悪いニュースがあるが……。どちらから聞きたい？」

「いいニュースから頼むよ」

信司がそう言うのと、大和は頷いて言った。

「ウイルスに対抗できるワクチンができた。だが、注射をしなければ意味はないし、そのワクチンは弱いから、整った環境でなければ何にもならない」

信司は淳吾と海女の顔を順に見ると言った。

「悪いニュースは？」

ワクチンは様々な医療機関で製作され、ウイルスの騒ぎは沈静化されていた。しかし、今度は次々に人が動物に襲われるという事件が発生したという。動物園の檻は何者かに破壊され、動物は狂ったように人間を攻撃する。これが全世界で発生しているようだ。

「そんな・・・」

「私達、どうしたらいいんですか!？」

うろたえる淳吾と海女を、大和が手で制した。

「とりあえず、まずワクチンを接種しよう。知り合いがいる。そいつに頼めばいいだろう。そこまで歩かなきゃならないが・・・。それが済めば、お前達は好きにすればいい。家に帰ってもいいかもしれない。・・・安全な場所なんて、もうなくなっちゃったからな・・・」

淳吾と海女が暗い表情になった。信司が顔を上げて言った。

「俺は、真実を知りたい」

淳吾がえ?と言った。

「どういうことだ? シン？」

「そのままだ。俺は何故こうなっているのか、真実を暴く。そして・・・どうにか道を探し出すさ」

私も、と海女が言った。

「私も、どうなっているのか、知りたいです! 皆を、皆を助けたい! !」

「俺だって・・・怖いけどさ・・・でも、それでも知らなきゃなら

ないはずなんだよ!!」
初めてだった。こんなにも、心が通ったのは。これを思い出すと、
今もふっと笑ってしまう。

第2話 戦う覚悟

「本気でそう思っているのか？」

大和は厳しい顔で言った。その中に不安が揺れているのを、信司は見逃さなかった。

「どうしてですか？」

大和は目を細めて言った。

「お前達の家族のことだ」

海女はハッとして目を見開いた。瞳が揺らいでいる。

「だ、大丈夫です。家が遠いし、友達と一緒にいるから大丈夫ってメールすれば・・・」

「無理だ」

大和はそれを遮って言った。

「何でだよ！？俺達は決めたんだ！絶対に世界を、いや、皆の笑顔を取り戻すって！！」

「話を聞け」

大和の目が冷たく光った。情は・・・消えていない。

「家族の安否、だな」

信司は大和の目を捕らえて言った。大和がコクリと頷く。

「生き残った人々もいる。病院に感染せずたどり着き、ワクチンを打った人間だな」

淳吾を見た。目の焦点があわず、迷子になった子供のように揺らいでいる。

「どういう・・・ことだよ・・・？」

「ワクチンを打った人々の名前は記録してある。そのデータがさっき届いた」

海女が小さく嘘やろ、と呟いた。

「その中に、二人の両親の名前がなかった」

そういうことだ、と大和が言った。

海女と淳吾の目が大きく見開かれた。話から悟ったのだ。両親の今を。

「ちょ、ちょっと、待って」

海女が未だに焦点の合わない目をしながら言った。

「アンタらは？アンタらの両親は・・・どうなん・・・？」

「とっくに蒸発しちまったさ。シンの両親は火事が起こったとき死んだ。小さかったシンを置いて。」

淳吾が絶望したように頭を抱えた。海女が床にペタンと座り込む。

「戦う覚悟はいい。でも、親がどうなったか、ちゃんと知るべきだ」

「大和」

信司は苦しみを抱える二人を見つめながら言った。

「何だ？」

「一度二人を家まで送る。それで・・・戦う覚悟が決まれば、またここに来る」

「二人の覚悟が決まらなかったら、お前はどうするんだ？」

信司はぼんやりと部屋の隅にあるゴミ箱を見つめた。そして首を振って言った。

「わからない。忘れたい風景が、消えなくて」

大和が小さくすまなかった、と謝った。信司は手をひらひらさせてそれを制止した。

「いいんだ。きつと、いや、絶対消えないと思うから。いつか向き合わなくちゃいけなかったんだよ」

どうしたらいい、と淳吾は自分に尋ねた。俺は、どうしたらいい。

―その中に、二人の両親の名前はなかった。―

死んだのかよ、親父も、母さんも。どうすればいい。二人が死んだら、俺に何ができる？

世界を、守れるのかよ？こんなにも、無力なのに？こんなにも・・・

・・・。

嘘や、嘘や、嘘や。そう海女は叫んでいた。名前がない？そんなの、漏れていただけかも。

でも、大和さんの情報は唯一の綱。この綱を疑ったら、進めなくなる。

目を閉じると、家族の顔が浮かび、苦しくなって目を開けると、現実には叩きつけられる。

――両親の名前はなかった。――

大和の声が海女の中でこだまする。

死んでいたら、戦えるだろうか？苦しくて、戦えないと思った。けれども、それと同時に、信司たちと立ち向かいたいという思いもあった。全てが、遠い。こんなに近いのに、けれども、遠い。

第3話 頼れる闇医者

淳吾と海女が立ち直る間も無く、大和の言う『ヤツ』のところへ行くことになった。防護服に身を包み、無言で外を歩く。外には遺体が転がっていて、虫が群がっていた。

「ここだ」

大和がそう言った。そこにはコンテナを改造した小さな小屋のようなものがポツンと立っていた。

「ここにいるの？」

信司は大和を見て言った。

「ああ。ヤツは変人だ。・・だがヤツの頭脳は本物だ」

大和はそういつてドアに近づくと、四回ノックした。

「・・ルーク。大和だ」

そう言うとかチリと鍵があいた音がした。大和が中に入っていったので、三人も後に続いた。

中は大和の研究室とさほど変わりはなかった。昨日したように消毒を済ませると、短髪の眼鏡をかけた青年がデスクに向かっていた。そして四人の方を向くと、ニコリと笑って言った。

「話は聞いているよ。君がヤマトの従弟の信司くん。で、彼が淳吾くん。横に居る女の子は海女さん、だよな？ 僕の話は聞いてないだろうから自己紹介させてもらうよ。僕は武井路加^{たけいみちかず}。誰かがネットで聖ルカ福音記者が何とか言ってる、まあよく分からないけどルークって呼ばれてるんだ。宜しく」

「おいおい、大事なことを忘れてるぞ。お前は闇医者だろうが」
ヤマトの発言に路加は困ったように笑って言った。

「だって、あれを受けたところでダメな医者はダメなんだよ。僕はあんなもの意味ないと思ってね。でも安心してよ。医学部は出てる

し」

路加の発言を疑問に思った淳吾が口を開いた。

「ん？でもさ、こんなに目立ったのに闇医者がいるって、すぐバレちまうんじゃないんスか？」

ヤマトが面白がるように笑って言った。

「実際こいつは国にバレてるよ。何で捕まってるのか、分かるか？」

「・・・ワクチンを開発したのがルークだから？」

信司が右手を挙げて言った。路加がおっ、と言って笑った。

「その通りだよ。実は他にも理由があるんだけど、シンくん、分かる？」

信司は少し考えて言った。

「確か数ヶ月前まで総理は『再発瘧がん』だった。治療が難しいがんだった。・・・なのに今は政界に元気いる・・・。ルークが、治療を・・・？」

おおっ、と言って路加は手を叩いた。

「お見事。ニュースをちゃんと見てるんだね。素晴らしいよ。その通り。僕が彼の治療をして成功した。だから国は目を瞑ってってくれるんだよ」

「確かに素晴らしい。・・・だが、まずこいつらにワクチンを打ってやってくれ。時間がないのはお前も同じだろう？」

路加は肩をくすめて言った。

「わかったよ。ヤマトの分は隣の部屋のクーラーボックスに入れているよ。一本適当にやっというてくれ」

「？ヤマトさんはどうするんスか？」

淳吾が眉をひそめて言った。

「俺は自分で出来るさ。少し医学をかじってたんでな」
そう言うと、ヤマトは隣の部屋へ消えた。

「あの、何でルークさんは全く分かれへんウイルスのワクチンが作れたんです？何で短期間で・・・？」

ルークは手早く海女に注射を打ちながら言った。

「・・・ある人に頼んで国のサーバーを覗かせてもらったんだ。・・・普通の国家の資料があって、一部に何か覆い隠されているところを見つけてね。解析してもらったらウイルスについてのデータがあった」

淳吾が驚いて言った。

「え！？じゃあ国はウイルスの存在を知ってたってことスか！？何で国はワクチンがなかったんスか！？」

ルークはワクチンを打ち終えて首を横に振りながら言った。

「分からない。けど彼女が、・・・僕が国のサーバーを覗くのを成功させた人だよ。彼女が言うには、外から接続して、サーバーに誰かが書き込んだ可能性もあるらしい」

淳吾が首を振りながら言った。

「一体何のために？」

「わからないよ。けれどその人が普通じゃない頭脳を持っているのは確かだ。・・・誰にも気付かれずに国のサーバーへ接続し、データを加える。その方法は誰にもわからない。・・・その人に目的を聞くしかないだろうね」

信司は二重になった窓から外を見た。

青かった。

いつもどおりに。

空は

青かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1150w/>

Why Don't You Fight?

2012年1月10日12時49分発行